

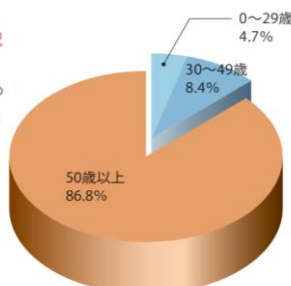
(10代~30代) 若い世代の献血へのご理解とご協力が必要です

このままでは、血液の安定供給に支障をきたす恐れがあります

輸血用血液製剤の約85%は50歳以上の方々に使用されています。

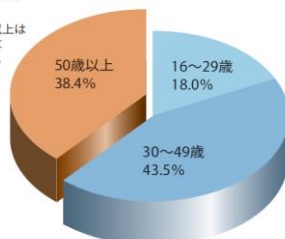
一方で、献血いただいている方の約60%は50歳未満の方々に、この世代の方々が輸血医療を大きく支えています。

年代別輸血状況
(令和2年度東京都)
輸血用血液製剤を
使用されている方々の
約85%は
50歳以上の方々です。

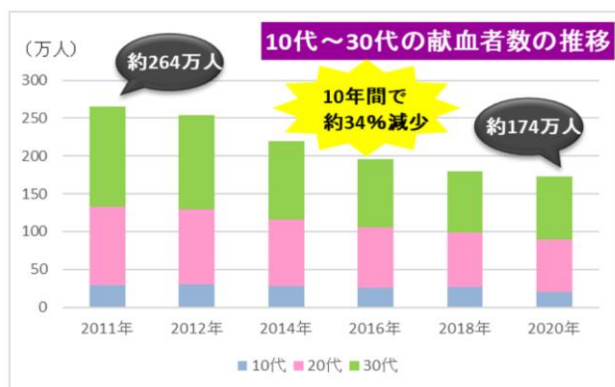
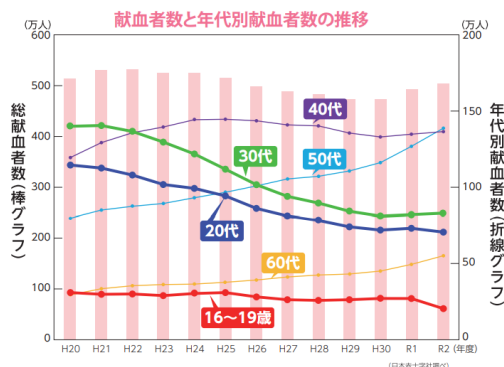


(東京都福祉保健局調べ)
※端数処理しているため、合計が必ずしも100%にはならない。

年代別献血状況
(令和2年度全国)
献血者数の60%以上は
50歳未満の方々に
支えられています。



(日本赤十字社調べ)
※端数処理しているため、合計が必ずしも100%にはならない。



日本国内では、少子高齢化等の影響により、主に輸血を必要とする高齢者層が増加する一方で、若い世代の献血が減少しています。10代~30代の献血協力者数はこの10年間で34% (2011年_約264万人→2020年_約174万人の約90万人) も減少しており、少子高齢化が今後ますます進んでいくと、血液の安定供給に支障をきたす恐れがあります。今後も患者さんに血液を安定的に届けるためには、今まで以上に若い世代の献血へのご理解とご協力が必要となります。

献血とは

献血は、病気の治療や手術などで血液を必要としている人のために、自ら進んで血液を提供する“身近なボランティア”です。200mL献血であれば、男女ともに16歳からできます。

どうして献血が必要なのか

医療技術が進歩した今日でも、輸血に使用する血液は、まだ人工的に造ることができず、長期保存することもできません。また、献血者の健康を守るため、1人の方が1年に献血できる回数や量には上限があります。輸血等に必要な血液を確保するためには、一時期に偏ることなく、1日あたり約14,000人の方に献血にご協力いただく必要があります。

長く病気で苦しむ人の命をつなぐために

病気や薬の影響などで十分に血液をつくることができなくなったり、事故や手術などで大量出血したときに、輸血が必要です。献血で集められた血液は、ケガなどの不慮の事故で使われるイメージがありますが、それは全体のごくわずかで、輸血を必要としている人の多くは、がん（悪性新生物）の患者さんです。輸血用血液製剤の多くは、がんの治療に使われています。

献血にご協力をいただく方の安全のために、献血前に問診医が健康状態などの確認を行いますので、安心してご協力いただけます。なお、献血の基準に満たない場合は、当日の献血をご遠慮いただくことがあります。献血について、ご不明な点がございましたら、献血スタッフにお声がけください。



「献血のながれ」についてご覧いただけます(埼玉県赤十字血液センターHP)